資　料　４
第７回（21.6.1）

「明日の京都」ビジョン懇話会

（オピニオンペーパー集）

平 成 ２ １ 年 ６ 月

２００９年4月１５日

たおやかで持続可能な京都（府）づくりの中心に気候変動への取組みを

委員　　浅岡美恵

京都議定書に始まる気候変動／地球温暖化への取組みは、今世紀にわたる地球規模での人類の挑戦と位置づけられています。京都はその最初の第一歩を踏み出した京都議定書誕生の地として世界に知られることになりました。

京都では、鮮やかな四季をもつ自然環境のもとで歴史ある文化がはぐくまれ、そうした環境が人々の心を繊細にし、都市と田舎の暮らしを豊かにし、高付加価値の技術や製品を生み出してきました。京都の気候は、京都が京都であるための最大の環境です。京都の環境とたおやかな暮らしを守るには、中長期的目標を定め、気温の上昇を最小限にとどめるために低炭素経済社会へと移行させていく取組みと、もはや不可避となった気候変動による被害への適応策の両面を計画的に推進する必要があります。同時に、京都がそうした取組みの先頭に立つことで、京都は世界のなかの京都としての存在を保ち、その役割を果たすことができます。逆に、今、直ちに始めなければ、その経済的、文化的損失は取り返しのつかないものとなるでしょう。

今から直ちに開始すべき気候変動への取組みには、以下のものが含まれます。

１、　気候変動の視点をすべての政策決定と実施の中心におくことを、府の方針の第 1 に掲げること

２、　先進国の一員として、2050 年までに 90 年比 80%以上の排出削減が不可避であるとの科学の要請を受け止め、その目標と整合する中長期の目標をバックキャスティングの手法で設定して明示し、府民とその目標を共有すること

３、　京都府内の太陽光・熱、風力、バイオマスなどの再生可能エネルギー源を、地域に即して目標設定をし、十分な普及促進政策を国に求め、地域においても独自に取り組むこと

４、　府内の住宅建築物のエネルギー高効率化の推進計画とその財政的情報的支援策を策定すること。とりわけ、地方自治体所有・管理にかかる建築物について、新築及び補修において国の基準よりも高いエネルギー効率目標を定め、地震対策及びアスベスト対策と一体として推進すること

５、　府内の森林資源はきわめて重要であり、森林拡充整備と多面的利用を結ぶ経済的仕組みを、国とともに、また独自に推進すること

６、　府域内全体を網羅するブロードバンド網を整備し、テレビ／電話会議や相談システムを〇年以内に導入して、南北情報格差を縮小し、あわせて交通需要を抑制すること

７、　　都市地域においては、歩いて暮らせるまちづくりを基本とすること

８、　　産業・発電部門など大口排出源対策であり、温暖化対策費用の財源として機能する国内排出量取引制度の早期導入を国に求め、地域の対策とリンクさせていくこと。あわせて、中規模排出源に対する地域版排出削減コミットメントの制度を導入すること。

９、政策決定及び実施、その改定のすべてのプロセスで市民／ステークホールダーの参加を確保し、支援策を推進すること

10、これらの目標、目標達成の政策／施策、情報公開と参加の制度等を自治体の条例で,自治体自らの取組みを含め条例で定めること

「明日の京都」 ー国際社会への発信ー

安 藤 昌 弘

「明日の京都」ビジョンについて、私の貢献すべき分野は、かねてより主張してきました国際社会への発信という点であります。関西空港が開港し、海外との大きな窓が開けられたのでありますから、関西地域のより活性化のために、各種の施策が採られるべきであります。そして、京都も、平成17年に京都迎賓館が開館し、各国大統領や首相等の訪問が際立って増加しています。しかしながら、そのように良い機会に恵まれながら、京都が国際社会に向かって望ましい発信をしているかというと必ずしもそうとはいえません。このため、以下の点を提案したいとおもいます。

1. 国際環境都市宣言

広島・長崎が不幸な被爆体験を基に、平和都市としてアピールし、また、神戸が阪神・淡路大震災の被災・復興体験を基に、自然災害復興都市として注目されているように、京都も世界に強くアピールするものを、府民全体で創り上げるのが望ましいと考えます。このため、世界環境会議のホストとなり、「京都プロトコール」として環境問題ですでに世界に知られることから、「環境都市宣言」を行い世界にアピールする。

Do you Kyoto? 何か京都(環境に良いこと)していますか？
というフレーズが世界各地で聞かれるよう様々な企画を行う。

(1) 環境問題研究施設(例えば、国連関係施設、大学や企業の最先端施設等)を集中的に誘致し、各国首脳が京都を訪れた時は、必ず視察コースとなるようにする。

(2) 環境モデル都市、モデル地区の設定

専門家の意見をもとに、具体的な施策を検討する。

(3) 環境サミットの開催

2. 各種国際会議の誘致と会議場の整備・拡充

京都には国際会議の拠点となる国立京都国際会館がかねてより存在し、それなりの実績をあげていますが、施設も開館後40年以上経過していささか老朽化し、今日

的な国際会議の規模からいえば拡充の必要があります。この機会に、より大規模かつ最新の設備を備えた施設にするよう目指すと共に、大学施設・各種研究機関とのネットワークを構築し、より効果的・機能的な会議の運営ができるようにすると共に、京都の豊富な歴史的・文化的伝統遺産を組み込んだ総合的な魅力ある国際会議都市とする。

3．国際都市として、外国人受け入れにもっと真剣に対応する。

(1) 道路、各種公共施設等に英語の表記、英文によるガイドパンフレット等を大量に発行し、外国人に優しい町となるよう、より改善する。

(2) 外国語（英語）教育の徹底

単に、英語を勉強するだけでなく、英語で学習するように、例えば、外国人に説明できるよう、英語で京都の歴史、文化、社会を中学・高校等で徹底的に教育する。

明日の京都　　オピニオンペーパー　　池 坊 美 佳

近年、世界における日本のプレゼンスが希薄化する中で「日本」としての存在感を発揮するためには、いい意味で日本が日本らしくなければならない、と想います。
そのためには、日本の各地、その地方に根付いた文化や思考に即した独自色を発揮し、京都は京都でその文化の独自性を発揮することで国際社会における日本の地位確立につなげることができると思います。

人は財なり、という言葉があるように京都文化が 1200 年以上連綿と続くのも文化を生み出し、その継承に心血を注いだ先人がいたからこそである。
日本の発展に貢献するためには、単に文化を守るだけではなく、それを日常に活かす努力を図ることが大切だと思います。
明日の京都を担う人材育成について以下の提案をします。

１．　習い事文化の復興・普及

■ 行政による支援、文化機関の協力による手軽に通うことのできるお稽古場の創出

かつては学校、家庭といった場所以外に地域社会ぐるみで子どもの教育にあたる風潮がありました。
しかし、核家族化、地域社会、学級の崩壊が進み、かつてのよき風潮が失われつつあります。
そのため、お稽古場にて団体行動の秩序、礼儀作法、年功序列などを学ぶことで伝統文化の学習のみならず社会で生きる上でのマナー習得が期待できます。
習いごとを通じ、日本文化の体得、自律心などの修養を身につけることができると思います。

２．　教育の充実

■ 京都独自の授業カリキュラムの導入など

郷土愛の修養、京都を語ることのできる人材の養成
正規の授業では習わないが京都が誇る文化は多数あります。
日本史の時間などに京都の歴史の舞台に赴き、臨場感を感じながらの授業を行い、京都への興味を持ってもらい、京都に誇りを持ち、伝統文化の未来を考える人材を育てる環境をつくります。

「私の描く明日の京都」

今井　一雄

「京都らしい地域間格差を、認め、補い合う社会の構築」

細長く立地する京都府は、色々な格差が生まれています。京都市を中心に、南部、中部、北部と全てに亘って、格差ある分布になっています。所得、教育、医療、インフラ、介護、交通網等々上げればきりが無いかもしれません。「均衡ある社会化」から「リスクの社会化」へと変わっていかなくてはならない時代ではないでしょうか。所得一つをとっても、年収でも百万程の格差があります。交通でも、利用度の少ないローカルほど運賃は高くなりますが、これから劇的に高齢化するローカルほど、公共交通機関が必要と成ります。医療もしかりで、全てに同じような現象が起こっています。つまりその様なリスクを京都府全体で分かち合える社会を考えなくてはなりませんし、それを理解しあえる社会の構築が必要と成ってきます。また、市町村単位での考えからではなく、振興局単位での発想を強化する必要を感じます。市町村の合併促進より、昔ながらのコミュニーティをより強化し、環境対策いわゆる、廃棄物処理、医療、医療介護、学校等々の問題では、スケールメリットを活かせた発想が必要ではないでしょうか。また、地域の発想をいかした取り組みも必要ではないでしょうか。国がやるような、要するに各省が何かアイデアを出し、地方から手を挙げさせるような、裁量型配分ではなく、今年三年目をむかえる「地域力再生プロジェクト支援事業」のような地域で考え地域が提案するような、提案型配分に変革していかなくては、責任ある地域主権にならないのではと思います。これからは、お金では片付かない、マンパワーを必要とすることが、ローカルほど要求度が高まってきます。高学歴社会になればなるほど、大学や専門学校のある都市に子供たちは出て行き、ローカルは、加速度的に過疎になります。京都は、大学等も多く、そういう意味において、学生の集まる都市であり、大学、専門学校が、積極的にオープンキャンパスをローカルと結び、実践教育により結びつけることの出来る、府ではないでしょうか。

最後に成りますが、何時もの持論ではありますが、これから若者のＩターン、Ｕターン促進していく為にも、伝統行事としての「祭り」の復活と、「地域の誇り」を知る教育時間を、ふやす

ことです。義務教育までの期間に、「祭り」への参加時間の容認とか、地域の方々の協力による「地域の誇り」を学ぶ教育時間を増やす等、地域とより密着する時間が必要ではないでしょうか。京都だから何処にも負けない人づくりが出来るのではないでしょうか。

私が願う明日の京都

立命館大学　教育開発推進機構
教授　　陰山英男

京都は、私達日本人が蓄積してきたアイデンティティを具体化している地域である。そのため、私達はそのアイデンティティが何であるかを具体的に明らかにし、そこに住む人々が共有し、国際化の波の中で、ともすれば失われるかもしれないアイデンティティを守る必要があると考える。では、そのアイデンティティとは何か、私なりに考え、二点提起したい。

１、自立と共生のライフスタイル

日本という国が大きく歪んだのは、バブルの時代であろう。そもそも日本は豊かであるはずのない国である。なぜなら、アジアのはしっこにある島国であるという特性から、交易をそれほど盛んにすることもできず、他国を支配するようなこともできない。ただ、そのかわりに資源もないということで、他国より狙われることもあまりない。先の大戦の失敗は、身の程をわきまえなかったことが一番の理由ではないだろうか。

陸続きの国は、足りなければ、よそから供給することができる分、争いも起きやすい。しかし、日本は日本人だけで協力し合い、自ら働き、生み出すことによって生きてきた。変に豊かさを求めなければ、国を平安に保つことができ、人々は幸福でいられる。

しかし、近年の金融のグローバル化で、パソコン上で数値を動かすだけで、富が得られるという時代となり、その結果、協調と自立の精神は大きく崩れた。国内における拝金主義と、日本人同士の疑心暗鬼。その果てとしての精神の荒廃が生まれたのではないだろうか。

では、これをどのようにすればもとに戻すことができるだろうか。

・　早寝早起き社会への復帰

日本人は勤勉であるが、健康を害してまでは働かなかった。家内安全、健康第一、働きすぎは、精神を歪め、必要以上の利益まで求めるようになる。生活リズムを日本人的な朝を大切にする早寝早起き型に直し、元気を取り戻し、土曜や日曜などは地域活動をみんな分担し合うようにする必要がある。

・　自立と協調の精神の復活

今の日本人は、やたらと人を批判したがる。うまくいかないことがあると責任転嫁をしてしまう。しかし、もともと豊かになることが難しい国である。うまくいかないことがあって当たり前という気構えであっていいのではないか。自立して生きていれば、他者を批判する必要もない。国や自治体が何かしてもらわないといけないという精神

は問題ではないだろうか。

・　公共交通網の整備と地域活用

日本人は、本来いいものを長く使う文化があった。しかし、消費は美徳と言われ、住居や自動車、家具など高額なものを比較的短期に買い換えるように変わってしまった。しかし、これらの高額商品を短期に買い換えるということは、個人としても、社会としての資産が蓄積されにくくなり、作る側も短期間使えればいいという安易なもの作りをしてしまう。

とするのなら、まず住居は耐久性のあるものになるよう、税制上の配慮を行い、また自動車がなくても生活できるよう公共交通機関の整備などを考慮し、地域の土地活用を効率的に行う必要性があるだろう。どうあっても、エネルギーは今後足りなくなる。効率的な社会のビジョンを今作るべきではないだろうか。

京都府は、そういう点ではまだ未整備のところは多いのではないだろうか。ということは、まだ発展の可能性を残していると考えるべきだろう。

２、教育改革

新しい指導要領が部分的にでも始まった。ゆとり教育は終わり、新しい教育が始まった。その目標は二つ。ひとつは学力向上、もうひとつは国際化である。

しかし、昭和の後半から崩れかけた子どもたちの生活習慣はまだまだ改善されたとはいえない。早寝早起き社会への移行は、子どもにとっては待ったなしである。生活習慣が乳幼児期に確立されなかった場合、その改善は難しく、睡眠する能力が育たないため、睡眠しても精神は癒されず、やがて不登校やひきこもりになる危険性がある。これは、学習能力の不備にもつながり、学力低下にもなる。

・　行政や民間の力も入れて、府全体で早寝早起き朝ごはん運動を行う。新しい指導要領の学習内容は難しく、かつ多い。このままでは、再び不登校の増加が起きてしまうだろう。対応が急がれる。
・　新しい時代の教育は、新しい指導法を必要とする。とりわけ、国際化に対応した教育のため、小学校から英語教育が始まった。これに対応するには、外国人講師を増やすことや、地域人材の活用が考えられるが、ＩＣＴ機器の活用も必要になる。人間はそうはいっても英語を何度も話してくれたりはしない。しかし、ＩＣＴ機器は何度でも繰り返してくれる。こうした機器の活用で、国際化をリードできる。
・　統一学力テストをすることで、序列主義が問題になる。しかし、序列主義が気にならないテストがある。それは、漢字や計算に絞ったテストを行うことである。これなら、ゴールははっきりしていて、限定的で序列は起きにくい。何より学習全体に与える好影響も大きい。

□テーマ：「私の描く明日の京都」
□京都外国語大学　ジェフ・バーグランド

京都府が大好き。自然も美しく、食べ物も美味しく歴史を感じさせる場所もたくさんあります。しかし、一番好きなのは、京都の「文化」です。文化を作り上げていくときには3つの関係が中心となります。①自然界との関係、②時間との関係、③他の人間との関係。自然界との関係には、3種類あります。自然を恐れる恐怖型と、自然とともに歩んでいく共存型と、自然をコントロールしようとする支配型があります。今の京都は、まさしく支配型に寄り過ぎています。恐怖型、例えば地震対策、河川の整備、伝染病対策などしっかり目を向けないといけません。DO YOU KYOTO？の背景には、自然共存型思想があると思います。

例えば、私が来日した頃にはどこの家でも風鈴を出していましたが、今の住宅は密封状態が多く、エアコンを一日中かけながら、自然の風を感じる余裕がなくなった。夏の着物は本当は涼しいのに、ホテルやオフィスビルなどのエアコンが効いているところに行きますと、寒いくらいです。

車の数もどんどん増えますが、ヨーロッパのように市内でも自転車が危ない。もっと自転車が走りやすいように車が走れない駐車も不可能なレーンを作るべきです。また街の中心部には放置自転車があふれかえり見にくい。日本と同様に土地の面積が小さいサンフランシスコのように自転車を縦に吊るす自転車置き場を数多く作るべきです。またホテルや、デパート大企業など全部自転車で来れるような工夫、例えば、自転車置き場を今より大きくするなど堂々と止められるような環境にしてほしい。

京都の見た目も支配型に寄りすぎている。プラスティックや他の人工素材が目立つ。自然素材を使った和風の建築を増やしていくそして古いものを保存していく必要がある。派手なネオンやのぼり、看板が京都の美しい姿を損なわせる原因となっているように思う。

時間との関係は、線のような時間、すなわち過去・現在・未来と円のような時間（春・夏・秋・冬や朝・昼・晩）を考えると過去・現在・未来のバランスが大切です。なんとなくビジョンと言いますと、未来というこれからの京都だけに目を向けがちですが、過去、そして現在、今の京都のいいところはあったのか？またはあるのか？例えば、京都市内にあった市電を廃止した時に、一方北欧では市電に似たようなものをこれから作っていくという計画がありました。即ち、今から思えばあの市電は未来の乗り物でした。オバマ大統領夫人のミシェルさんが着物模様の洋服でおでかけした時には世界のニュースになりました。今まで培ってきた職人の技と完成をバックアップしていく府政の関わり方を今まで通りのものはもちろん継続し、さらに新しい体制も考えるべきだと思う。円のような時間、朝・昼・晩、本来の朝起き、夜暗くなったら寝るのは当然のこと、24時間営業スタイルでも人を呼び寄せるための大量の明かりなどは法的に規制すべきだと思います。春夏秋冬の旬の食べ物や季節の行事をもっと大切にしていくべきです。例えば、祭りの日には、時間を決めて全く車を禁止する。

他の人との関わり方が一番問われる時代です。戦後から個人主義が強くなりすぎてもう一度集団主義の良さを見直すべきだと思う。例えば、京都市内の祇園町のように消防訓練を強制的に一世帯から一人参加させ、自分たちの地域の危ないところや景観、バリアフリー状況など調査して町内ルールを作る。それと同じように府民が住んでいる地域の集団生活をもっと充実したものにしていくための地域づくりマニュアルを作成して地域リーダーワークショップをするなどしてリーダーの育成に力を一段と注いでいこうということが大事だと思う。世代間の触れあいがもっとできるように北欧のように小学校と老人ホームのデイケアセンターを隣接していくこともこれから考えるべきだと思う。三世代共同生活をされているところの府民税の控除があってもいいのではないかと思います。

人と人をつなぐのが、コミュニケーションであり、もっとコミュニケーションをしやすいように将来の京都を考えるべきだと思う。
車と車がすれ違っても挨拶できないが自転車に乗っているときや歩いているときは、すれ違って挨拶ができる。場合によって立ち止まって話をする。こういう人間関係中心文化こそ京都の安全・安心、くらしのコミュニティを作る土台となる。そのためにもっと車を規制すべきだと感じます。少なくともヨーロッパのように奇数・偶数日制度や香港のように年間 200 万円程度の高額な税金にみあうような新しい制度を考えるなどして欲しい。とりあえず、人と人の直接の触れ合いの場を増やしていくべきだと思います。

　世界を旅すると、様々な文化があります。その文化の感覚をもって京都にやってくる外国人も大切な情報源になると思います。友好大使制度を強化して、京都府がもっと住みやすいもっと楽しいもっとゆとりや豊さを感じる場所となるように外国人の知恵を拝借するのも一つの方法かと思います。また、デイケアセンターや老人ホームにいる高齢者にも意見を調達するのと同じく、小学生や中学生にも意見を出してもらう。
そのために、京都府に住んでいる人たちに呼び掛けてコンテストをしてもいいと思います。例えば、5 つの部門、自然・景観・観光・経済・国際交流などの部門に分け、「私の描く明日の京都」と題して、各部門で何か賞を決め姉妹都市などの旅行券があたるなどのイベント性も持たせて、府民全員参加で実施してみたらどうかと思います。私が、呼びかけ人をさせていただきます。

以上

明日の京都ビジョン懇話会　　'09.04.10　　新宮　七郎

世界に通用する京都ブランド

京都府社会の優位性　　“ 世界の古都「京都」＋　ふるさと原風景　＋　荒波日本海まで ”

１.地球環境や資源エネルギーの保全と活用

昭和３０年代から産業革命・高度成長時代に突入、結果、大幅に地球を汚してきた。私は農山村の奥山集落に住んでいる。従前には、不便ななかで、地域にあった地球に負荷を掛けないいろいろと工夫した生活があった。利便の追及だけでなく、もっと昔（従前）の良いところを活かすべきだと思う。農山村には、「エネルギー資源(木材･水資源･太陽光)」並びに「食料生産力(田畑・里山・兼業農家)」が無残にも捨てられている。過密と過疎は人口のみでなく、資源の使い過ぎと放置まで引き起こしている。この問題の解決に関しては、誰が、どのように活用するか？である。『京都発のウルトラＣ、こんなやり方があるのか！』と人を唸らせる仕組みづくりを考える必要がある。

２.交流連携の拡大の地球規模化の問題

グローバル化も大きな潮流であるが、同レベルで個性形成が重要である。地域経済は人の往来が重要な鍵となるが、世界一流の「京都」「KYOTO」をそのために活用することが重要だと思う。観光でも、モノづくりでも留学生受入でも同じことが言え、「京都ブランド」はその大きな誘引剤、或いは刺激剤として十分に活かすことが出来る。

とりわけ、環境エコとエネルギー保全問題に絡んで、「京都舞鶴港」が大量物流拠点と成り得る。世界を相手にするなら「京都港」であり、同時に国内名称は「舞鶴港」、この使い分けも重要となる。時代は、いかにしてコストカットが出来るか？である。つい先日までの「一時の速さ」の追求よりも、コストカットの探求が更に加速してきている。だから、京都港から近距離にある「中国･韓国･ロシア」を相手とする大量物流拠点として、重要な「京都の北玄関」になれる可能性が極めて高いと考える。舞鶴若狭道、京都縦貫自動車道は、そのための重要な連結道となる。今、そのための投資を惜しんではならず、名神高速、北陸自動車道等への連結の早期完成を目指すべきである。

３.都市と農山村の二極化と国土構造バランスの問題

狭い日本、大きく使おうと声高に言いたい。しかし、その様な発言をすると、田舎に住みたい人もいるが仕事が無いから無理だ、と言われる。でもそれは、職住に関する付加価値明細と国土構造を支配する行政サイドの誘導的政策、この２点から創意工夫を加えることにより、もっともっと情報をわかりやすく提供できる。そうすれば、大幅に農山村の魅力が出るものと考える。

都市部住民の疲弊感・孤独感・人間疎外感が益々増加している。その一方で、農地・里山・山林のいずれもが荒廃し、地方集落の崩壊が急速に進んでいる。加えて、今の小規模農家は、70-80 歳の高齢者が担っていると言え、更に国土荒廃の大波が押し寄せることは明らかである。その結果、いろいろな面から都市部を脅かすこととなる。団塊の世代が大量退職する今の時期に、しっかりとした「古さと再生・人間の妙味」に対する手を打たないと、国土の大方を完全に荒廃させてしまうであろう。（平成２１年４月８日の京都新聞朝刊　添付）

４.少子化・高齢化と人口減少問題

今の高コスト社会、雇用不安定社会は、子育てするには厳しい環境だと思う。すべてに通じるかもしれないが、本当の意味の地方分権社会を構築し、地域に合った、身の丈に合う、コスト対効果が見える地域主権の社会を取り戻すべきである。特に、東京発の仕組みは極めて高コストになっており、しっかりと道府県が物を言わなければならない。

今日、田舎は高齢化社会ではなく『高齢社会』である。限界集落と言う言葉は好きではないが、もう限界に至っている集落が沢山出来てきている。高齢者比率では、夜久野町域は 38.78%、大江町域は 37.29%、三和町域は 36.58%、福知山市全体で見ても 25.29%になっている。(H21.03 値)そこで、知恵を出さなければならないのが元気な高齢者の生甲斐づくりであり、活用の舞台づくり

だと考える。府域のトータル運営、地域での子育て・教育環境整備やモノづくり後継者育成など、おじいさん･おばあさんの出番は、数えればキリがない。たくさんの「舞台」は存在する。

また、雇用の安定なくして子育てへは繋がらない。将来に対する安定が確保されなければ、子供をつくること自体を躊躇するであろう。社会保障機能を維持するためにも、雇用構造改革が必要だと思う。昨年後半からの急激な経済危機が極端な雇用不安を引き起こしており、国の緊急対策と連携して、京都ジョブパークを始めとして職業紹介組織の責務は格段に大きくなっている。一方、核家族化の進展に連動するかのごとく、不登校や子育て不安、教育現場の荒廃や社会規範の判らない（教えてもらえなかった）児童生徒の増加など、多くの弊害をもたらして来た。だからこそ今、地域や集落での子育てが必要であり、低コストで運営ができる高齢者活躍舞台が拡大するよう大きく期待する次第である。人生経験の少ない親たちの不安は「十分助けて上げられる」と思う。歴史と伝統・伝説に包まれた京都だからこそ、子供たちに「大きな感動と感銘」を与えられる。幼少時における独自の『京都人格形成塾』が誕生することを祈りたい。

逞しい「京都人間」「京都を深く知る人間」「広い京都を語れる人間」を育てるべきである。メイドイン京都・京都マインド・誇れる京都の情報発信。　⇒　やれば出来る。

選択は、やるか・やらないかの二つしかないのである。

５.経済成長の鈍化と雇用不安定化　　社会資本の老朽化

社会資本の老朽化が魔物である。急激に整備された社会資本が耐用年限を揃って迎えることとなり、再整備に対応するだけの経済成長がない。短期的視点、長期的視点のいずれに立っても、財政負担に耐えられなくなる恐れがある。現に多くの構造物の耐震補強すら実現していない。何もかもをもっと安価で実施できるように高コストからの脱却が必要と考える。低コスト社会になれば、給与ベースが下がっても耐えられるのではないか？　そのためには、資金力の偏りを治さないといけない。国地方の関係にしても、例え話であるが、予算化された資金が途中の流通過程が高コストなために、国民に対して、真水として予算が働いていない。何とかしないといけない。

６.ＩＴ化の進展と豊かな暮らし　　社会に新たな課題

国のＩＴ化戦略と企業宣伝に乗せられて、便利な暮らしが享受できる社会となったが、行政も企業も、大きな投資と大きな維持費を背負っている。また、情報に関する地域格差も非常に大きい。中山間地域には、携帯電話通話不能地域、地デジ TV が見られない地域、通信回線が低速な地域、これらがまだまだ沢山ある。その一方、都市部では高度な高付加価値の通信が大きく吹聴される。総務省も地デジの TV 宣伝しているが、難視聴の僻地は高い受益者負担金無しでは見られないという悲しい現実がある。当地域では、ｅ－ふくちやま整備事業でブロードバンド化が進んでいるものの、プロバイダーが１社しか参加せず、選択がまるでできない状態。今までのプロバイダー契約を捨てて皆が１社に集約されるのか？　何かおかしいと思う。

７.和の文化が見直される時代に　　新しい日本文化が発信される

和の文化・日本文化の基礎である「京都文化」は他に誇れる大きな財産である。京都きもの物語は、大きな魅力であり、常に利用できる風呂敷から高いファッションレベルまで幅があり、地域戦略として強力な武器と考える。京都という洗練された強い背景、何事においても、これを借景とした展開を進めるべきである。

８.自己中心主義を優先する風潮が強まる問題　　地域社会のあり方が変化

経済至上主義がもたらした弊害である。人格よりも金銭の多寡が評価され、地域のため、人のために努力しても報われないという悲しい状況になりつつある。まだ地域では、皆で消防団を･･･、或いは出役作業で地域環境を維持する機運が残っているが、匿名で生きられるところは「関りたくない」で済むらしい。これが大問題であり、犯罪の増加に繋がっていると考える。大きな災害が起き、一人では何も出来ないことを知る。これでは遅い。遠くの親戚より、近くの他人が助けてくれ

る。地域福祉の基本を考える上からも極めて大切なことである。自治会・町内会等地域活動への参加の問題であるが、私の住む田舎でも、長老支配とかの古い慣習は消え、民主的な運営が出来つつある。が、自分中心の考えから「関わりたくない」、このような身勝手人が増加しているのも事実である。勤務の状況にも左右はされるが、ゆとりがないことは確かである。もっとスローライフが進展するよう願っている。田舎では、自治会がNPO福祉法人みたいな業務を担ってきたものであり、行政も、自治会等の位置づけをしっかりすべきであり、国土保全の観点からの支援策を講じるべきである。

９.行政のあり方　　根本から変えることが必要な社会

地方分権を叫びつつも、行政組織は中央集権組織を脱していない。その証拠が行政側から指示を届ける形、即ち「縦割り行政の温存」である。特に今の時代、総合的な検討が求められる事象が多いなかで、住民サイドから見れば極めて対峙しづらい体制と言える。また、住民主権を目指すうえでは、本部機能をスリム化し、子会社方式或いは事業部制を導入、権限や財源を最前線に与え、互いに切磋琢磨して「スピード」「対応力」を重視した住民目線の体制、中長期政策に関しては、時代に即した総合政策中心の体制づくりを急ぐべきである。

地方分権社会にあって、道州制や広域連合等を視野に入れたならば、京都府庁が政令指定都市にある必要があるのだろうか？

京都府の南部と北部、南北に長い府域の振興を考えるとき、府市協調も大事なことだが二重行政的な面も拭いきれず、京都府庁を中丹地域辺りに移転するぐらいの決断があっても良い。地下鉄や快速電車で生活する職員が、京都中北部の日々の生活を踏まえた創造力を発揮できるだろうか？

府庁が北部地域に移転することによって、政策の企画なり発想においても変化が生まれて当然である。京都港等の今後への重要課題も身近に見えるようになり、環境保全、エコ輸送拡大への注力は大きく前進するものと考える。

私の描く明日の京都

千　宗室

京都の街を喩えてみると、親の遺産を上手に活用している。そんなイメージがある。あまりよい例と言われないかもしれない。しかし、実際この街に住んでいる人間の一人として冷静に辺りを見回してみた時、いたるところに、多くの人達が大切に今日まで守り続けてきた多くのものが目につくのは間違いない。

仕事柄全国各地に出張する。大きな街から小さな街まで。近代的な開発が進められている街から、それほど時代の動きに左右されなかったひなびた場所まで。何処にいっても私が京都の出身だということになると、大変親しげな中に話が繋がっていく。京都に来たことのある人も、また京都に来たことのない人も、京都という言葉に対する様々な想い入れを持っておられることを痛切に感じる。

またそういう街の中には、いくつもの“小京都”といわれる場所がある。
その小京都という言葉に対して、そのように讃えてもらっている京都の街に住んでいる人間が、もっと感謝の念を持つ必要があるのではないだろうか。
“京都には及ばないけれども”というその言葉の奥底を持ち上げてみれば、“京都のように長い歴史はないけれども”であるとか、“京都のようなたくさんの文化がないけれども”とか、そういうことなどだと思う。

この街に生きた多くの人たちが、しっかりと私たちに守り伝えてきてくれたその様々な京都の良さを、本当に次の世代に心して渡そうとする人たちが、どれほど存在しているかどうか、私には些か心もとない気がする時もある。

憧れてもらっている街というのは、それ自体が得がたい環境に置かれているのだ。あたり前のように目にする古びた街並や社寺仏閣、そういったものを、ただ単にそこにあるという目でこの街に住んでいる私達は眺めていてはいけない。私たちもこの街に今この瞬間、間借りしている人間の一人にしかすぎないからだ。京都市もそして京都府もそれぞれの立場で様々な開発を続けていかなければならないのは、人が生きていくうえで致し方ない。致し方ないけれども、そこに内外各地方面から寄せられてきた熱い眼差しや、憧れに対する責任感を放棄してしまうようなことがあっては絶対にならないのである。

このままいけば小京都という言葉もいずれ消えていってしまうかもしれない。この土地に住む一人一人の人間が、府や市の区分を超越して、それぞれ自分達の足下をしっかりと見つめ直す時は、今をおいてないと思っている。

「私の描く明日の京都」

平成２１年４月１０日

髙木光（京都大学）

１．　はじめに

＜京都府の社会がどうあってほしいか＞という問いをどう受け止めるかは、人によって様々であると思われる。「社会」を「個人の総和」と考え、先の問いを＜京都府民のひとりひとりがどのように生きるべきか＞と理解すると、その答えを出すことはビジョン懇話会の役割を超えるのではないかと考える。

というのは、私は、京都府民のひとりひとりがどのように生きるかは、基本的には各人の自由であり、＜京都府民であることを誇りに思うべき＞であるとか、＜京都府の一員であるからには積極的に府政に参加すべき＞であるとは考えないからである。

したがって、以下は、京都府政が、どのような「京都府の社会」＝「一人ひとりの府民の生き方の総和」を想定すべきか、それとどのように関わるべきか、そのためには府政に関わる議員、知事、委員会・委員および職員がどのような心構えで職務を遂行すべきか、という観点からのものである。

２．　都道府県間の競争

地方分権の時代においては、よい意味での「都道府県間の競争」が必要である。この観点からは、府民の多くが＜京都府民であることに満足している＞あるいは＜京都府民であることを誇りに思う＞という状態が望ましいということがいえる。

というのは、他の都道府県に転居したいと考える府民が少なく、また、京都府に転居したいと考える人が多いという状態であれば、一応、＜京都府の社会は悪くない＞という判断を下すことが許されそうであるからである。（日本人をやめること、あるいは日本人になることは、それほど簡単ではないが、京都府民をやめること、あるいは京都府民になることはそれほど難しくない。）

そこで、京都府政は、＜府民満足度を高めること＞あるいは＜府民が京都府民であることに誇りを持てるようにすること＞を心がけて運営されるべきであるということになる。

３．　京都府の特殊性の活用

ビジョン懇話会でのこれまでの議論で、京都府の特徴として、伝統と革新の共存をはじめとする＜多様な要素の調和＞、人と人の「つながり」や「支えあい」の重視が指摘された。そして、多くの委員は、そのような他の都道府県にはない特徴を生かしてゆくことが大切であると考えており、私もそれに共感する。

そこで、望ましい府政の姿は、様々な考えを持ち、その置かれた状況も府政に対する期待も様々な府民のひとりひとりにとって、「理解しやすく」「相談しやすく」「支援を求めや

すく」「批判しやすく」・・・「参画しやすい」府政ということができよう。

このような「・・・やすい」という要素は、福祉の分野では「ユニバーサル（デザイン）」などの用語で説明されているところであるが、京都府の特徴を表現する場合にはカタカナではなく、適切なやまとことばまたは漢語を「発見」ないし「発明」することが望ましいと思われる。

また、私の専門である行政法学の立場からは、府政の「公正さ」や「廉潔性」もまた忘れてはならない重要な要素である。たとえば、府政が特定の団体の圧力に屈して法令の執行をゆがめることがあるとか、知事が違法な献金を受け、あるいは組織的に裏金が作られるというようなことがあれば、「主権者」である京都府民の「恥」ということになるからである。

４．　格差是正の視点

避けて通れない論点として、財政上の制約の問題がある。この点については、ビジョン懇話会のメンバーにおいても合意を得ることは難しいかもしれない。ただ、小泉改革の負の側面や現在の厳しい経済情勢からすれば、「大きな政府か小さな政府か」という二者択一的な問題設定で答えが出ないことは確かである。

限られた財源の中で、工夫をして、府民の期待に応えてゆくためには、「できることと、できないことをはっきりさせる」という観点が重要であると考える。ただ、京都府の特徴を考慮した場合には「格差是正」という視点は不可欠であると思われる。ここでいう「格差」を広い意味で捉え、そのなかに、物的・金銭的な豊かさ以外の「情報」「ゆとり」など多様な要素を盛り込んでゆくと、従来の「弱者保護」という観点も包括することができるのではないか。

５．　「上から目線」の克服

第５回の懇話会で「育む」という表現には「上から目線」が感じられる、という指摘があった。行政と社会の役割分担を考えるとき、この指摘は重要であると思われる。行政は「社会を育む」という発想をするのではなく、「社会を見守る」「社会の活力を引き出す」という発想が適切であろう。「自助＋互助＋共助＋公助」の適切な役割分担を実現するためには、「自律」と「自立」を損なわないような「支援」の在り方を常に意識する必要がある。

６．　おわりに

以上、抽象的ではあるが、これまでのビジョン懇話会での議論から受けた示唆を私なりにまとめてみた。「法律学者」は夢を語るには最もふさわしくない人種であるが、多士済々の懇話会から「勇気」をいただいたような気がしている。

「私の描く明日の京都」　　平成21年4月10日　中村宗哲

1. 百年に一度の心の掃除。　　1.

百年に一度という金融や経済の大恐慌がたった半年余りで世界の国を襲い、今や国際社会に及ぼす影響力とスピードには、想像を越えるものがあります。

経済を成長さす事は、国や社会を発展させ豊かにする目的には違いありませんが、果してその事で、人々の心は本当に幸せで、豊かになってきたのでしょうか。

日本においても、戦後64年が経ち、時代の流れと共に、いつのまにか、個人主義や、経済至上主義へと、人の心も社会も、大きく変化してきました。

物や経済が豊富となり、人々の幸福や、平和を求めてきたはずの今日、決して世の中の思惑通りになっているとは云えず、争いや事件が絶えません。それどころか、人の心は益々、荒廃しているように思われます。

物やお金では、真の豊かさは、得られないという事に気付かされています。

私達は、今こそ現代の諸々の自然現象や、社会情勢を「天の声」として、敬虔な心で受け止め、学ばして頂く事が必要なのではないでしょうか。

この繁栄の裏に、何かそこに、天や神仏の思し召しに添わぬ、自然の理に叶わぬ人間の欲の心遣いを使ってきてはいまいか、大切なものを見失ってきてはいないかを今一度、振り返って考えてみる節目ではないでしょうか。

経済を立て直す以前に、私達の心を立て直す事が大切で、経済を扱う、私達の欲の心を省みる事が、先決なのかもしれません。

我さえよくば、人はどうなってもよいという、我が身かわいいの身勝手な心。自分の誠の心の足らない事を省みず、人のせい周りのせいにする、自己中心的心遣い。

贅沢も時には有難たいが、質素、慎ましやかな事も喜べる心。

物に溢れた生活よりも、無駄を省いたシンプルな生活は、美しく清らかです。日本は資源が少なく、自給率も低い中、輸入に頼らなければならない現状から、先の時代の為にも、(食料難を想定して)、備えの意識、エコ意識、足るを知る心を、日頃の結構なうちから、養う心構えと教育が必要だと思います。

又、我慢や忍耐が、どのような事にも乗り越える力となり、自分の心を鍛え、成長、成人さすものであると信じて、喜べる心。

核家族化に伴ない、親や祖父母との交流や縁が薄くなってきている世の中です。昔は、2～3世代の家族と一緒に生活し、暮らしの中から、ごく自然に親孝行や報恩の精神、又、道徳観、倫理観、宗教観(御先祖様、神仏を崇拝する心や信仰心。)が養われ、得るものも多くあったと思います。

特に親孝行においては、「親」という字は、立つ木を見ると書きますが、大地の恵みの如く、目に見えないところでしっかり根をはり、幹や枝葉に養分を与えて、只ひたすら草木の成長を見守り続ける、根の働きが、親の存在であるという意味ですが、その尊き根っ子(親)に、肥やしを与えずして、良い花(子)を咲かせる事は出来ません。

将来の子供達や、社会、国の為にも、人間の最も

基本的精神である「親孝行」という徳積みと、土台なくして、本当の繁栄は、あり得ないのではないでしょうか。

親に少しでも喜んでもらい、感謝の念と恩に報いる心に努めさせて頂く事こそ、真の幸せ、安泰への道に繋がっていく事になると思います。

又、今は、人の物を平気で盗んだり、誤魔化したり、騙(だま)したりと、まことに罪悪感の欠落が目立ちます。

人が見てようが、見てまいが、悪い事をしたらお天道様(てんとうさま)が観てられるから、バチが当たる、人は騙せても天は騙せないと、常に自分の心の中に、目に見えない神の玉が宿っていて、判断を下せるという倫理観は、本来、親が家庭生活の中で、子供の小さい時から、繰り返し、繰り返し云い聞かせて、躾てあげて育っていく心です。いかに親の心遣い心掛けが、子供の人格に影響を与えていくかは計り知れません。勿論、学校教育社会教育も同様の事が申せます。

何事も本当に大切な事は、目に見えないところや気付かぬところにあって、普段の日々の事柄を通して、誠実に、ていねいに、時間と心を掛けて、積み重ねていくところに、ものの真理があると思います。

政治、経済、文化も総て、人の心が皆、形となって時代に繁栄されていきます。今こそ、原点に立ち戻り、次の世代の為に、真実の種をまく節目であり、百年に一度の心の大掃除、心の教育、(道徳教育)、世直しが求められているのではないかと思います。

Ⅱ. 心の教育は京都から

京都の街は、1200年という悠久の歴史、伝統、文化に支えられてきた、たぐい稀なる恵まれた環境でありますが、その魅力の根底には、自然の美しさと共に、紛れもなく神道や仏教の奥深い教えや信仰心といった、目に見えない高い精神性に培われ、それらが、永い年月の間に、自然な形で、人々の生活、暮しの中に融合して、息づいてきた事にあると云えます。

その神仏の恩恵は、申し上げる迄もなく、京都のお祭りや、伝統行事、歳示記等、(初詣に初まり、節分、お彼岸、巻祭り、祇園祭、お盆、送り火、あらゆる行事等々---。)に顕著に物語っているものでございます。

正に、京都は生きた宗教都市、精神文化都市と申せます。

前記にのべさせて頂いていますように、時代と共に人々の道徳意識、倫理意識も希薄になっている昨今、何を心の支えにしていけばよいのか分からず、心の芯や軸となるよりどころを求めて、生きる指針、方向性を見いだしたいと思う現代社会の悩みに、今こそ、京都の果たす役割は大きく、京都人の魂の特性を生かして、日本の心や、人の道を説く心の教育、道徳教育、又人間学は、京都から発信する、京都こそ、発信しなければならない使命があるのではないでしょうか。

日本には、素晴しい古典が沢山遺されています。
先賢の優れた知恵や云葉、教訓、格言等、充分過ぎる程、存在します。

又、神仏の教えの力を借りて、宗教（宗派を越えて）を1つの学問として、巾広く学ぶ、心の余裕も必要です。
なぜならば、宗教心、信仰心を抜きにして、道徳や倫理、哲学は語れるものではないからです。

又、家庭教育における躾、行儀、言葉づかい、公衆道徳、更には、あらゆる各度から、徳目を盛り込んだ"人の心を美しく養う"「道徳教育副読本」に力を注いで頂き、京都がその担い手となって、家庭、学校、地域社会、国へと、浸透させていって頂きたい。そして、道徳教育の授業が、絶対に不可欠であるという意識の先達役になって頂きたいと、切望致しております。
（現在京都府からお出しになっておられる道徳教育の資料集の続きを作成していって頂く。）

"心の教育は京都から"そういう仕掛けこそが、京都は"心のふるさと"と云って頂き、真の精神文化都市としての役割が果たせ、延いては、世界平和の貢献に繋がっていくものではないかと思います。

私の描く明日の京都

2009 年４月 10 日
佛教大学四条センター所長
教育学部教授
西岡正子

京都の歴史と文化を未来へとつなぎつつ、人が幸せに暮らせる新しい生き方を探り出すことが必要です。豊かな文化の中で、人が幸せに暮らせる京都を願います。そのためには男女共同参画社会の実現が不可欠です。

子どもや若者が幸せに暮らせる京都であって欲しいものです。少なくとも仕事をもち生活をするという当たり前の夢と希望を持てる京都府、その希望がかなう京都府であって欲しいものです。

既に様々な対策がとられているとはいうものの、授業がまともに出来ない、また教員が夜遅くまで仕事をしなければならない小、中学校があります。どこの小、中学校に通う児童生徒も、ある水準の教育が受けられる京都府であって欲しいものです。また、学校現場やその他組織において学生や若者が人手不足を補う要員のような扱いをうけること無いようにと願います。

子どもや若者を非難するのは容易いです。しかし、それで済む事ではありません。現実に目を向け、社会の問題として課題を解決していかなければなりません。若者が仕事をし、子どもを持ちたい者が子どもを持ち育てることができる、また人間らしく自分の時間や家族と過ごす時間をもつことのできる生活が望まれます。男女とも仕事と家庭生活のバランスのとれた生活ができる。そんな当たり前の事が実現する京都府であって欲しいと願います。最も基本的でかつ究極の願いといえるかもしれません。

しかし実際、実現は困難なであるといえます。教育の充実に向けて過度に地域住民やボランティアに依存することから既に問題が生じています。教育には人件費を含めお金が必要です。産業の活性化、雇用の創出、職住接近の実現、格差のない社会の実現などなど京都府の活性化のための施策に向けて、京都の多くの個人と組織が立ち向かって行かなければなりません。子どもや若者の問題を個人のせいにするのではなく、新しい社会づくりの中で、夢を叶えられるようにしたいものです。

京都府の南と北の間の大きな差を見過ごすことができません。生涯学習における機会の均等化に関しては京都府生涯学習審議会において 10 年以上も議論さ

れ、様々な試みが実施されてきました。その一つがインターネットを活用したブレンディッド学習による講座の開発です。高度映像情報センターからグッドサイト賞を受け、アメリカで日本を学ぶ為に活用されるなど高い評価を受けています。しかし、その利用において京都府の南北で大きな開きが出ています。委員会における議論の過程で、北部に住んでいる方から「京都」という言葉で括って議論しないで欲しいという要望や、住んでない者の勝手な意見に対する困惑の声を聞いています。

そこに住む人と組織との連携により、目的の達成に向けて実際に「機能する」ことが必要であると思います。

教育、福祉等様々な分野で、多くの組織や団体があります。各専門分野で将来像を描き、実現に向けての活動が実施されています。それらが、実際に機能することが肝心ではないでしょうか。「機能」する組織、団体、人々があってこそ、またそれらを信じられる京都であってこそ、人は幸せに暮らせることになると思われます。

人と人、人と組織、組織と組織の連携と融合により、各組織が「機能」を増すことによって、子どもと若者が希望を持って生きていける幸せな京都府が生まれることを願います。

私の描く明日の京都

畑　正　高

明日の京都を考えるとき、私たちが心から真剣に見つめなおさないといけないことが二つあります。それは「温故知新」の実践と「知足」の理解です。

「温故知新」の実践

私たちはだれもが、直近の未来を見るために、直近の過去にその助言を求めています。たとえば、「このところお酒が続いているからちょっと休肝日」とか、「次の週末はもう一度花見」とか。実は、人間の営みとは、そのほとんどが、この程度の情報収集と、この程度の検討結果の積み重ねなのではないでしょうか。

同じなら、自分の近未来を検討するのにいま少し積極的に過去に踏み込んでみませんか。良質の情報収集に基づいて未来の考察をする方が、よりよい道程へと確実な一歩を踏み出す可能性が高まると思うのです。大切な要点は、京都こそが「日本文化」を考えるうえで最も良質な情報収集の場だということです。私たちは、どれほどまでにその当事者として認識をしているのでしょうか。

歴史や伝統というものは「資産」だと私は捉えています。固定資産として預かっていることにもそれなりの意味はあるのでしょうが、流動化させる工夫が働くことによって、大変な可能性がそこにあることは歴然としています。私たち京都にかかわるものは、そのような資産を日常生活の中で直接体感できるということがいかに恵まれた特別の環境かということを心して知るべきでしょう。それだけに、京都にかかわる者にはそれを預かる責任の重さが伴うのです。

本当の意味で、命をかけて「温故」をしているのでしょうか。その結果として、責任ある「知新」の歩みを私たちは覚悟をもって試みているのでしょうか。

このような意味で京都を語るとき、かつて王城の地であった洛中を中心とする文化圏に意識が集まり、山城や丹後・丹波などは、また別の世界のように考えられがちです。しかし、それは大変な勘違いだということも容易に気づくことができます。なぜなら、歴史や伝統という資産があることに意味があるのではなく、その資産を流動化させる責任ある工夫にこそ意味があるということに気づくなら、京都府下のあらゆるところに、事の大小は別にして、その可能性が綺羅星のごとく潜んでいることは誰もが知っているからです。

私にとって、丹後は民話の故郷に見えます。丹波は里山文化のメッカでしょう。山城は、歴史のジャンクションと呼ぶにふさわしい魅力を持っています。そのどれもが、他の地域にはまねのできないほどの迫力を秘めているのではないでしょうか。もてる資産をいかに流動化させるか。これは、その当事者が主体者となって内なる力をたぎらさない限り、単なる埋蔵資源でしかないのです。

「温故知新」という偉大な示唆を、単なる表面的な知識として流してしまうのではなく、他にまねのできない知恵としてわが物にしてしまうことが、京都に託された我が国の願いであろうかと考えています。

「知足」の理解

石庭で有名な竜安寺には、「吾唯知足」の四つの文字が見事に意匠化された蹲が知られています。口という一文字を共有して四

方を囲むように四つの文字が配され、円相を埋めています。この「知足」という言葉にふと教えられることがありました。一般的には、この言葉は、自らの分際をわきまえ、むさぼりの心を起こさぬことというように解釈されるのでしょうか。もちろんこれでよいのですが、果たしてそのように抑圧的に自己管理を求めるだけの教えなのでしょうか。

私たちの営みの基本は、ハードウェアとソフトウェアの組み合わせだと私は考えています。この二つの言葉はコンピューターの世界の専門用語と理解されがちですが、人間にとって生きるということは、物を知り手に入れて、その使い方を学び工夫することの連続でありました。歴史を顧みればその実際はたやすく理解することができます。文明を育むとは、まさにその二つの組み合わせだったのです。

高いレベルのハードウェア環境を手に入れながらレベルの低いソフトウェアを展開されると、いかなる悲劇が引き起こされるのか、私たちはいま少し考えてみる必要があります。豊かな物質文明に彩られる現代日本の社会にあって私たちがさまざまに直面する諸問題の多くは、この組み合わせのちぐはぐに起因しているのではないでしょうか。

高いレベルのソフトウェアが展開されるとき、例えばハードウェア環境のレベルがそれほどに高くなくとも、それなりの安心したパフォーマンスは期待できます。もちろん両者がともに高い位置で揃ったときに展開されるパフォーマンスのもたらす結果は、大変なものであろうと思われます。しかし、展開されるソフトウェアのレベルが高ければ、ハードウェアのレベルなど問う必要もないのかもしれません。質実な環境において大変高い精神世界を具現し、精神的な充足や美しい花鳥風月の織りなす季節感を謳歌してきたわが国の知恵は、このことを証明していると思うのです。

私たち人間がその営みの中で真に求めるべきものは、ソフトウェアを磨き続ける楽しさなのではないでしょうか。ハードウェア環境に意識を囚われ、物質的なレベルを求め続けることの儚さを、私たちはすでに充分に自覚しているはずです。「知足」という境地は、遠い昔に先人たちが出会った結論だったのだと思い至ることになりました。物質的環境を追い続けることの虚しさを知り、知恵や工夫の楽しさこそが私たちの豊かな日常を彩ってくれるということだと確信するのです。

「精神的首都」

明日の京都を考えるとき、歴史が教えてくれるこれらの雄大な哲学をしっかり基本理念に据えて、様々な局面において、前向きな精神力にあふれる対応を志せばよいのだと感じています。結果として、わが国の精神的首都の担い手として私たちが新たな歩みを始めたとき、京都は再び人々の心の故郷として認知されることでしょう。そして迷える世界に、普遍的な指針を発信しうる日々が到来することと確信しています。

平成二十一年四月

私の描く明日の京都

社団法人　京都青年会議所
直前理事長　福井正興

私は、この京都の地に暮らす皆様とともに歩むにあたり、単に改革路線を打ち出すのではなく、守るべきものは守り、変えるべきものは変え、創造することによって人をひきつける魅力を常に生み続けることが大切だと考えています。そうすればこの京都は魅力ある地域になると信じています。そして、市民が持つまちへの思いが発揮できる場を創出し、市民の方とともに真剣に考え苦しむ中から生まれる運動を展開していくことで、ここに暮らして本当に良かったと思えるまちの実現を目指さなければなりません。また、自らが暮らす地域を明るく豊かにするには、そこに暮らす皆様の目線で考えているかが大切です。
「進取果敢」に挑む覚悟、すなわち、元気に何事にもひるまず、自発的に取り組み、決断力を発揮し行動する覚悟があれば、市民意識は変革され、必ずこの京都のまちは変わると私は信じています。

今、私達が暮らす京都のまちは、１２００年以上の歴史に培われた、自然と共生する心や四季折々の美しい文化を持つ、国際文化観光都市となりました。このまちには、自ら進んで物事に取り組み、守るべきものは守り、変えるべきものは変え、創造することによって、人を惹きつける伝統を常に生み続ける精神が根付いています。
この精神は、悠久の時を経て、今も暮らしの中において実感することがでます。独自の優れた文化、芸術、技術、感性などです。
文化、芸術が人にもたらす潤いや安らぎは、まちの魅力を向上させ、まちの活性化の原動力になります。先人から受け継いできた文化的資源をこれからのまちづくり繋げていくこと、また、伝統ある芸能や技術、食文化など、これら多くの文化資源を次代に残していくことは、まちの魅力を高めていくことに繋がります。つまり、伝統の上に積み重ねる新しい文化、芸術を創造していくために、市民、さらには国民が感性を育み、生かすことができる舞台が必要です。他の地域でも出来ることをするのではなく、地域の魅力が素直にみえる、地域の顔がはっきりみえる、まちづくりをしなければなりません。
さらに、市民の活発なコミットメントによる創造活動を牽引することにより、先端的な技術・芸術や豊かな生活文化を育み、伝統を継承しつつ、まちの未来を刷新していくことを振興する“創造の場”に富んだ京都を構築し、地域の諸問題とともに、グローバルな問題をも持続的に解決する力に満ちた都市・京都を目指してほしいのです。

現在の日本は、先端分野ではアメリカと競合し、家電製品などではアジアからの追い上げが激しくなっています。戦後の日本は、造船、自動車、半導体など時代ごとに強い分野を育ててきました。今でも精密機器や電子部品など、日本が得意な分野はたくさんありま

すが、日本経済を真に豊かにするには、新たな“ＭＡＤＥ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ”をつくることが必要であり、それを京都が担うべきです。

京都で最大の産業は、観光ではなく製造業だと考えます。京都は、日本でも有数の工業都市であり、西陣織、友禅染、京焼に代表されるような伝統的な工業、そして現代的なハイテク産業、また、京料理や京菓子、宇治茶などに代表される食文化が、京都を支えています。ものづくりの都市としての京都の特色は、古く平安時代にまでさかのぼることができます。様々な専門分野の職人が京都に集い、他では見られない高水準の製品・商品をつくりだしました。京都の持つ高い文化力が、ここで生み出される製品・商品をしっかり支える役目を果たしています。

日本におけるものづくり都市として京都をしっかりと継承し、発展させると同時に、目先の観光収益にとらわれず、時を経ることで価値が高まるまちづくりをしなければならないと考えます。一瞬の時流にながされるのではなく、とてつもなく長期的なビジョンを掲げることができるのが日本で唯一、京都ではないでしょうか。

以　上

私の描く明日のビジョン

京都子育てネットワーク
代表　藤本明美

希望を持てる社会像へ向けて、子どもの意見を聴く・　府民の意見を聴く
～若者の自立支援と社会参画を進める京都府～

１．現状：いじめ・不登校・引きこもり・雇用、失業問題・・・
　引きこもり（全国１３０万人）：自立支援策(2000 年～)を行っても功を奏しない
　自己肯定観が低い（世界比較）：自分の考えに自信がない
　　コミュニケーション力が育っていない
　　人間関係が希薄
　　→日本の大人社会の問題

２．子どもの意見に耳を傾け、社会に取り入れ、大人と子ども・若者で社会の仕組みをよりよいものに変えていこう
　・ロジャー・ハート「子どもの参加のはしご」(注＊)の上部の段が当たり前になる社会を目指す
　・大きな事からではなく、小さなことからやり始め、実践を積み重ねて次第に大きなところまで動かす
　・年月をかけて社会を変えるという気構えをもつ
　＊現状
　・そもそも子どもたち・若者が声を出すという経験すらない
　・声を出す場があっても、限られた（選ばれた）子どもだけ。日常生活と関係ない。
　・子どもが自分の気持ちを声にだせるようなスキルを伝える活動(CAP など)もある。

３．行政評価の視点の変革：
　なにをやったか→誰に・どこに・どんな成果があったか
　量的な評価（何人集まったか）→質的な評価（係わった府民がどう変わったか）
　効率やコストの評価→参画のプロセスを評価（事業を行う組織の中で「実践」できる「仕組み・手法」を整え、参画の質を上げる。そして、それによって何が変わったか）

注＊：参加のはしご
　①操り参加　②お飾り参加　③形だけの参加　④子どもは仕事を割り当てられる、情報与えられる　⑤子どもが大人から意見を求められ、情報を与える　⑥大人がしかけ、子どもと一緒に決定する　⑦子どもが主体的にとりかかり、子どもが指揮する　⑧子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する

参考文献：「協働コーディネーター～参加協働社会を拓く新しい職能」／ぎょうせい／世古一穂編著
「ヒア・バイ・ライト（子どもの意見を聴く）の理念と手法～若者の自立支援と社会参画を進めるイギリスの取り組み)」／萌文社／　奥田睦子（編著・監修）
「子どもの参画～コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際」／萌文社／奥田睦子編著

私の描く明日の京都

堀　場　　厚

日本の都として長く文化や政治の中心として栄えてきた古都、京都。１２００年以上続いたその都市文化は世界的に見ても類がありません。特にそこに根ざした各種の伝統文化は日本人的な繊細さと気配りの集大成であり、人類にとっても貴重な財産であると確信しています。

これらの文化や遺産をどの様に次世代に引き継いで行くかは大変重要な課題であり、また日本文化が世界で正しく評価され、その価値の偉大さを広く認識される様に努力することは、今後の世界平和の原点である文化交流の面からも大切なポイントです。

当然ではありますが、これらは書物や映像技術だけで伝わるものではなく、そこで生活を営んでいる人達の直接的な行動が空気伝播のように伝わり、また人々の生活の中に活きている文化でなければ時代永劫に伝播されて行くことは無いでしょう。

その意味で今、京都府民の役割は大変大きく、重要です。すなわち京都府民は文化の活きた伝道師という大切な役割を担うことになります。府民一人ひとりが、その意義の深さとそれに参画できる光栄さを認識することで、より積極的な行動に移れるものと思います。

「文化」と一言で言っても、その中には一般的に言われているような伝統文化や食文化、また価値観や言葉、挨拶などの日常文化、さらには建築物など、遺産としての文化など、ジャンルは無数にあるようにも思われます。これらの種々のジャンルをいくつかに系統立てて分別し、伝承して行く努力が今必要と強く信じています。

特に、子供たちへの伝承という意味では、京都府や京都市の小・中学校における独自の文化伝承教育が必要であり、それは全ての生徒に受動的に課せるのではなく、何らかのきっかけを与えた後、興味を示す生徒たちに徹底的な指導とチャンスを与えてそれぞれ能動的な学習グループを形成して行くことが大切だと思います。

例えば、正しい京言葉を子どもたちがマスターすれば、それらの会話がもたらす間合いが心の余裕や京文化独特の思考につながって行くこともあり、日本文化の他の分野への展開のトリガーになる期待も抱かせると考えています。文化は、ある自然な広がりから生まれるものであり、当然強制されるものではありませんし、この様な草根の様な活動が大きなうねりとなり、それがまた、日本人として誇りを持って生きていく活力にもなり得るのではないでしょうか。

まず、郷土や自国の文化に誇りを持ってこそ他の地域や国の理解につながり、新たな交流が生まれ、真の友情や平和が育っていくでしょう。京都がその発信都市として重要な役割を担うことで、この地域や都市の格をさらに上げ、その誇りがまた新たな文化や活力を生み出すと確信しています。

京都府の将来像

丸毛　静雄（京都新聞社）

□はじめに

地域のことは地域の実情をよく知っている市町村や地域住民が決め、実行する。そんな地方分権の早期実現が待たれる時代にあって、京都府の将来像も地方分権の流れの中でとらえるべきではないか。

国と市町村の間に位置し、間接行政を担う都道府県が果たすべき役割は何か。二重行政の弊害がささやかれる政令市（京都府の場合は京都市）との関係をどう整理するのか。道州制の議論や関西広域連合の構想ともからみ、まずはこの点を抑えておく必要があると考える。

京都府が担う役割はこれまで通りの視点から「明日のビジョン」を描くのか、それとも地方分権の進展とともに京都府の役割は縮小、あるいは変質するという観点から描くのか、によって大きく異なると思うからである。

この点がビジョン懇話会のテーマにならなかったのは残念だが、分権の担い手は市町村と地域住民ーを視点に据えながら、全体をふんわりと包む感じで、こうありたいと思う京都府の姿などを思いつくままに記したい。

□人に優しい、人を大切にする京都府

府民は京都府に対して何を望んでいるのだろうか。人によって異なるかもしれないが、ここだけは一致するという共通項となれば「この地に生まれ、育ち、暮らしてよかった」と思えるようなところであってほしいということになるのではないか。

ただ、それにしたところで「この地」は京都府というより、市町村、あるいはもっと狭い地域をさすことが多いだろう。

総体としての京都府となると、なかなか難しいが、生まれ、育ち、暮らしてよかった、と思ってもらうためには何が必要かを考えたらどうだろう。それはつまるところ、「人に優しい」「人を大切にする」ということではないか。

どこの市町村に暮らそうと、人に優しく、人を大切にするところなら「よかった」と思うはずであり、そこがふるさとになり、愛着も生まれるに違いない。

（そればかりではない。現実の世界をみれば、非正規従業員が雇用の調整弁として使われる経済界をはじめ、年間３万人を超える自殺者、地域や家族間ですら薄れる人のつながり、クレーマーなど増える一方の攻撃的な大人たち、そして相次ぐ無差別殺傷事件…。原因はいろいろ考えられるが背景の一つに、人を大切にしなくなった社会、人から優しさが失われたことがあるのは間違いない。戦後６０数年、そのツケが今の世に噴き出したともいえる）

そこで「人に優しい、人を大切にする京都府」でありたいと思う。

市町村や、そこに暮らす住民の意向を考慮せず、「こういう方向でやります。これに従ってください」と決めるのはいかがなものかとは思うが、ゆるやかなくくりの中で、京都府としての将来ビジョンを示す必要はある。

たとえば、新時代の京都づくりに向け、「人に優しい、人を大切にする京都府」を旗印として掲げてもよいのではないか。

もちろん、一つのアイデアにすぎない。新京都府総合計画の中期ビジョン「人・間（にんげん）中心」の京都づくりと、どこが違うのかとの指摘があるかもしれないが、「中心」では物足りない。「優しい」「大切にする」と言い切ってしまうことで、京都府としての思いの強さ、いわば「覚悟」のほどを示すことになるのではないか。

新時代の京都府政の旗印であると同時に、府民一人ひとりが生きるうえで目指す方向となるような理念を掲げたい。

□京都らしさ

旗印さえ決まれば、福祉・介護・医療、教育、経済など各施策は、「人に優しいか」「人を大切にしているか」で取捨選択、優先順位を決めればよい、といえば少し乱暴すぎるだろう。

市町村の自立、住民自治を大事にするとしても、それぞれ勝手に施策を展開したのでは、連携の効果は期待できない。京都府としての一定のまとまりが求められる。京都府とは何か、京都府らしさ、つまりは京都府のアイデンティティーにもつながるものだ。それに応え、まとまりや統一感をもたらすのは京都府ということになる。

歴史、伝統産業や伝統文化、海や山といった豊かな自然などを挙げることもできようが、南北に細長い地形もあって、何が京都らしいのかを言うのはたやすくない。京都府全体を貫くもので、できれば他府県にはないものがよい。

都市部があれば、漁村に山村もある特徴から、「多様性」を挙げることもできる。市町村がそれぞれの特性を発揮しながら、互いに認め合う。パクリと思われてはいけないが、「みんな違って、みんないい」のような感じはどうだろう。

新しい時代を築くという観点からいえば教育や子育てもあり得るのではないか。もちろん国の大きな指針があるが、京都府が独自にできる部分もある。

（教育でいえば、かつて蜷川府政のころ、高校三原則を京都府だけが存続させた。時代も異なるうえ、功罪も十分検証できていないが、「十五の春は泣かせない」の蜷川知事の名セリフもあって、今なお語り継がれている）

難しいことを言うのではなく、たとえば、「人に優しい、人を大切にする」の旗印とも連動させ、「おもいやりのある京都っ子」を掲げた教育、子育てを京都らしさとしても構わないのではないか。生きる力を重視するなら「たくましい

京都っ子」でもよい。いずれも、言いっ放しではなく、市町村も含む京都の教育や子育ての政策の中で、実効性のある事業を展開し、京都の教育、子育てといえば、「あれか」と言われるようになればどうだろうか。

それが進んで、京都いえば、思いやりのある子どもが多いところとして定着すれば、もっとすてきなことだ。つまり、京都らしさをすでにあるものとしてとらえるのではなく、創り出す発想である。

高齢化の進行は京都府も例外ではない。医療、介護、年金など、お年寄りの不安は高まるばかりだ。根本のところは国が考えるべき問題だが、安心を得るにはほど遠いのが現状だ。そこで、教育や子育てとも絡め、子どもからお年寄りまで「いくつでも、いくつになっても生き生き笑顔」を京都らしさとして発信することも可能ではないか。

京都議定書発効の地として、二酸化炭素削減や省エネ、リサイクルなどに行政も企業も府民も、京都府を挙げて取り組む「エコ京都」、あるいは自然を大事にする心も合わせ「地球に優しい」を京都らしさに掲げてもよい。

確かに、京都府が本来持っている歴史や伝統、文化などの基盤の中に、京都らしさを見いだす方がオーソドックスではあるが、少しインパクトに欠けはしないか。少々強引ではあるが、新時代を切り開くという意味からも、新しい京都らしさを創りだすことを考えてもよいと思う。

□京都市との連携

京都といえば、大抵の人は社寺、大学のまち、町家、伝統文化など京都市のことを思い浮かべがちだ。

京都府が管轄するのは政令市である京都市を除く、市町村である。とはいえ、府庁は京都市内にあり、府立図書館はじめ、文化博物館など府立の施設も多い。京都市民も府民であるから、不思議ではないが、似たような京都市立の施設もあるため二重行政が指摘されるところだ。

無駄を省くのは当然だが、京都市が持っている「力」を活用しない手はない。大学の先生をはじめ、宗教家、文化人、職人…他府県、他都市にはない人的資源といえる。審議会や諮問機関の委員としてだけではなく、学校教育や生涯学習はもとより、まちおこしや地域づくりに参画し、知見を生かしてもらうこともできるのではないか。

年間の観光客数が５０００万人に迫る京都市と連携、観光ルートを組めば府内の観光地の活性化につながる可能性だってある。

要するに、京都府の中で大きな位置を占めながら、政令市として独立している京都市とどう連携し、生かすかが京都府の将来を考えるうえで重要な鍵を握っているということも視野に入れておきたい。

「医療人からみた明日の京都」

京都府立医科大学　学長　　山　岸　久　一

１．　癌対策で安心を得る為に

癌に罹患する人は、男性は２人に１人、女性は３人に１人であり、死因の第１位は癌であり、年に約１０万人が癌を原因に死亡しています。すなわち、３人に１人は癌が原因で死亡することが統計で示されています。

癌で死亡される場合に最も多く生ずる症状は、“ 疼痛 ” でありますので、痛みや精神的苦痛に対する緩和医療が充実する事が重要であると考えます。少なくとも、京都府内で各医療圏に１つの緩和病棟が存在する必要があり、京都市内には、少なくとも１０の緩和病棟が必要と思いますが、現在、京都市内には２つの緩和病棟以外に京都府域には全く存在しないという現状であります。京都府立医大では、１５年前より緩和医療チームを立ち上げ、附属院で活動を続けてきて、平成２０年から疼痛緩和医療学講座を創設し、同年１０月から緩和病床を設置すると同時に、３ヶ月に１回緩和医療講習会を３００～４００人規模で開始しており、緩和医療にたずさわる医療人（医師、看護師、薬剤師など）の人材育成に努力しております。

緩和病棟を京都府全域に設置するには、対応できる人材（医師、看護師、ソーシアルワーカー等）を急いで育成する必要があり、都道府県癌連携拠点病院である京都府立医科大学および京都大学の両大学が、その人材育成を行う責務を担うべきで、早急に充実する必要があります。

緩和医療は、入院しての加療の結果、家に帰れる状態になれば、在宅緩和医療と並行して行われるべきで、各地の医療機関に訪問看護ステーションを充実して、保健所の協力を得ながら、在宅緩和を全府民がいつでも受けられる体制を整えれば、府民は安心できると考えます。

２．　高齢化社会の対応して安心を得る為に

介護を含めた老人のケアセンターを府全体に充実する。出来る限り自宅で家族と共に過ごせる事が理想的な姿だと考えますので、現在のディケアセンター、或いは在宅ケアの現況調査をする中で、全府民が必要な時に必要なケアを受けられる体制づくりをする。また、自宅へ帰ることが不可能な人には、宿泊型介護センターが、何時・誰もが必要時に入所可能な体制を整える必要があります。その中には、リハビリテーションを介助する技師が常時勤務する体制が必要です。自宅へ帰れる人を産み出すべくリハビリ機能を持つ介護センターが府内全域に存在すれば、府民に大きな安心感がもたらされると考えます。

以上２つの体制整備を全国に先がけて実施出来れば、医療・福祉面で京都モデルが全国に広がり、日本全国民の安心につながると考えます。